さいくうあと通信

発　　行　明和町　斎宮跡・文化観光課
（明和町大字馬之上 945 番地）
電話：0596-52-7126　FAX：0596-52-7133
E-mail：saikuuato@town.mie-meiwa.lg.jp

御糸特集

江戸庶民の着こなし　～松阪もめんと御糸織り～

「松阪もめん」というと一度は見たことがある方、聞いたことがあるという方も多いと思います。縦縞（たてじま）の柄が特徴の松阪もめんは、今からおよそ３００年前の江戸時代、江戸に進出した松阪商人により広められました。今まで紺色一点張りだった織物に、縦縞柄を取り入れたことで、江戸の庶民の間で大流行しました。粋を誇りとした江戸の庶民にとって、この縦縞は江戸気風にぴったり合い、しかも安くて丈夫で、一躍江戸の人々の最大限のオシャレとなりました。歌舞伎役者さんが縞の着物を着ることを今でも「マツサカを着る」と言うそうですが、それほど、縞柄といえば松阪もめんが代表的な存在でした　。

この松阪もめん、実は現在も明和町で紡織（ほうしょく）されており、「御糸（みいと）織り」の名称で受け継がれています。明和町にある御糸織物工場では植物の藍で糸を染めて、機械で反物を織るという、全国でも珍しい一貫体制で生産を行っています。染色し天日干しを行い、美しい藍色の糸ができあがるのはまさに職人技。単に“藍色”“縦縞”といっても、色の濃淡や線の太さなど、デザインのバリエーションはとっても豊富です。町立歴史民俗資料館（ふるさと会館２階）でも御糸織りの作業工程などについて模型を使いわかりやすく紹介していますので、ぜひ一度お立ち寄り下さい。

江戸時代から今も変わらず愛され続ける御糸織り。明和町の誇れる特産品の一つとしてどんどんＰＲしていきたいと思います！！

特徴的な縦じまと豊富なデザインが魅力

役場職員も業務で着用、御糸織りを PR しています！

～伊勢街道沿いの歴史的建造物の調査を実施しています～

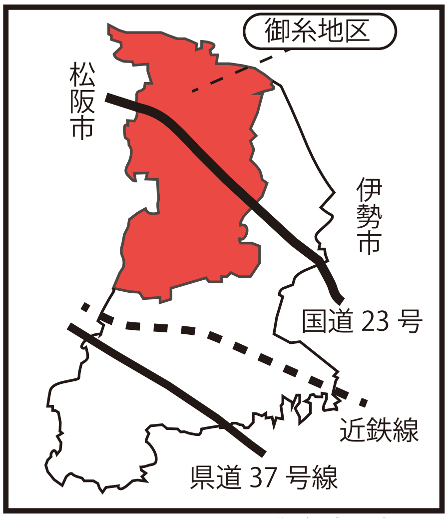
斎宮跡・文化観光課では「明和町歴史的風致維持向上計画」に基づき、今年度から平成 27 年度の 3 年間、史跡斎宮跡地内を通る伊勢街道沿いの建物を対象として、まちみ調査及び歴史的建造物の調査を実施しています。調査により、これまで大切に残されてきた街道に関わる文化的・歴史的資源を活用した「歴史まちづくり」を進めるための基礎情報を収集していく予定です。住民の皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。

なお、ご不明な点は役場斎宮跡・文化観光課（電話：52-7126）までご相談下さい。

身近な歴史　- 御糸地区編 -

かみに捧げた糸

明和町の北西部にある御糸地区には、多くの歴史が埋もれていますが、今回は２つのキーワードから御糸の歴史を考えていきます。



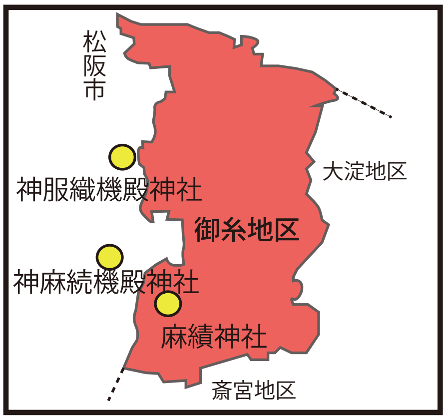
御糸地区位置図

①「みいと」って？

「みいと」にはどのような意味があるのでしょうか。

「みいと」はご存じのとおり「御糸」と書きますが、「御」は、本来天皇家や神様に関係するものにつけられる字です。そして「糸」は織物に使う糸をさしています。このような地名がついているのは、古くから伊勢神宮に織物などを奉納してきた地域であるからと考えられています。

現在は、松阪市にある神服織機殿神社（かんはとりはたどの）と神麻続機殿神社（かんおみはたどの）が伊勢神宮に織物を奉納しており、御糸地区と伊勢神宮の関係はなさそうに見えます。しかし、御糸地区の古い名前は､「おみ」といって、現在の中海がその中心だったと考えられています。中海は､「なかおみ」がなまったものと考えられていて、現在も古い地名がそのままついた麻績（おみ）神社が残っており、歴史を物語っています。



御糸地区にゆかりのある神社

②地名読めますか？

御糸地区の古い地名は、平安時代以降の古文書などに出てきますが、これらは異なる漢字を使っていたり、読み方が少し違ったりしていて、現在の地名の由来になったと考えられます。

そこで、クイズです。下の地名は、御糸地区のどこの在所をさしているかわかりますか？

①「河尻」、「阪本」、「馬野」（このあたりは簡単ですね。ほとんど変わっていません。）

②「焼土」、「稲倉」、「養田」、「丹川」（少し難しくなりました。）

③「中麻続」「佐岐」､「五百木部」（右２つは結構難しいです。「五百木部」は「伊福部」とも書きます。）

※答えはページの下側をご覧ください。

<斎宮跡で熱気球をあげました>

8 月 31 日、夏休み親子熱気球係留フライト体験にて。上空から見たいつきのみや歴史体験館と 1/10 模型

～クイズの答え～ ①川尻、坂本、馬之上　②八木戸、根倉、養川（養田・丹川）　③中海、志貴、行部